

子ども健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)

論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Growth and respiratory status at 3 years of age after moderate preterm, late preterm, and early-term births: the Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

予定日より妊娠期間が短く出生した子どもの3歳時の発育と呼吸器症状:
エコチル調査

ユニットセンター(UC)等名: 大阪ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Archives of Disease in Childhood Fetal and Neonatal Edition

年: 2024

DOI: 10.1136/archdischild-2024-327033

筆頭著者名: 平田克弥

所属 UC 名: 大阪ユニットセンター

目的:

短い妊娠期間と3歳時点での発育障害(身長・体重)と呼吸器症状(喘鳴・喘息)との関連を明らかにすることを目的とした。

方法:

妊娠32週から41週で出生し、単胎で先天異常がない、86,158人の子どもを対象とした。発育障害を3歳時点の身長・体重が10パーセンタイル未満、喘鳴はエコチル調査の質問票による回答、喘息は医師による診断により定義した。社会経済的因子および周産期因子を調整した後、妊娠32-33週、34-36週、37-38週で出生した子どもが、妊娠39-41週で出生した子どもと比較して3歳時点での発育障害や呼吸器症状の出現率に違いがあるかを検討した。

結果:

妊娠期間が短い子どもほど、妊娠39-41週で産まれた子どもに比べて、3歳時点の身長・体重が10パーセンタイル未満となる割合や、喘鳴・喘息の出現率の上昇と関連していた。

考察(研究の限界を含める):

妊娠32週から妊娠38週6日までの早産においても、妊娠39週から41週の出生と比較すると、発育障害や呼吸器症状の出現率上昇と関連がある可能性が示された。小児科医や、保健師などの医療従事者へ、これらの成果を共有すること、妊婦へ適切な医療とケアを提供することが、重要であると考えられた。本研究の主な限界は、主要な結果に関するデータが、家族の記憶や、主観的な判断によって質問票に記載されたデータであることである。

結論:

妊娠39-41週より短い妊娠期間(妊娠32週から妊娠38週6日まで)は、3歳時での発育障害・呼吸器症状の出現率の上昇と関連していた。